

おまけSS 雨

（幼馴染と媚薬と出られない部屋。LTL後日談）

※当おまけSSは本編終了後のお話です。本編視聴後の閲覧を推奨致します。

初夏にもかかわらず夏らしい熱い日差しはどこへやら。曇天に包まれて太陽一つ、星一つ見えない日が続いた。

燕はつい先日恋人になったばかりの幼なじみといつも通り下校を共にしている。

この前は「手を繋いで帰りたい」なんて勢い余って言ってしまった燕だが…。

傘を差してはいるものの、それは幼なじみとの相合い傘ではなく。各々一人に一つずつ傘に入っている。

未だに若干距離があるのは、好意の裏返しだということは幼なじみもよく分かっていた。少しさみしい気もするが、クラスメイトにからかわれたり、親にやんややんやと言われたりしたら燕が沸騰したヤカンのようにやかましく怒り出すのは目に見えていたから何も言わずにいた。

「あーもー、連日の雨続きで嫌になる。何とかしてくんないかな…」

「髪の毛ハネるしさあ」

男子にしては長めに伸ばしている髪がくるとハネていた。どうにかしてハネを抑えたいようで、後頭部の毛先を手で必死に押さえてはいる。しかしそれは無駄な足掻きで、燕の気持ちを無視するようにびよんと外向きにハネた。

「ここ最近丸一日晴れた日なんて無かっただろ？もういい加減にしてほしいんだけど…」

燕はぶつくさと文句を言い口を尖らせた。幼なじみと一緒に帰れるのはそれはそれは嬉しいのだが、あいにくの天気だ。燕は早く帰りたいらしく気持ち早足で歩を進めていく。

二人が進む先に大きな川にかけられた橋が見えてきた。橋には遮蔽物が無く、通過すればもれなく雨風を直撃する。しかしこの橋を通らなければ、二人の自宅まで遠回りになってしまうため致し方なく通るしかない。

二人は橋を見た瞬間、言葉にはしなかったものの「こんなところ通りたくない」と言いたげなげんなりとした表情で足を踏み入れた。

びゅう、と大きな音を立てて一陣の風が吹く。

「あー！！！！」

途端、二人は叫ぶ。

それもそのはずで、強風に吹かれて二人が手に持っていたビニール傘が吹き飛んでしまったのだ。二つの傘はさも楽しそうに橋の上を転げ回っていく。

不幸中の幸いか、豪雨の中出かける人間も少なく、車に轢かれることなく、通行の邪魔になることもなさそうだった。しかしここは橋の上。もう一度強風が襲えば、橋の下を流れている川に落ちて行って回収できなくなることは目に見えていた。

「早く取りに行かないと……!」

二人は走って傘を迎えに行こうとするも。

バシャン。

大きな水音とへぶっ、という呻き声ともクシャミとも取れる声がその場に響いた。嫌な予感がして燕はゆっくりと振り返る。

「ちよっ!?!」

燕の幼なじみは派手に転倒していた。

顔から水たまりに突っ込み、ローファーはすっぽ抜けている。滑りやすい橋の上で、これまた滑りやすいローファーで走る……それは自殺行為にも等しい。

あともう一步で飛んでしまった傘に届くというところで燕は踵を返し、幼なじみに駆け寄

る。

「大丈夫か?!」

燕は手を差し伸べるが、大丈夫なはずもなく。上半身は泥だらけ、膝は少しばかり擦り傷ができていた。

雨がざあざあ降り続ける中、燕は気にもせず幼なじみの手を引っ張る。

「ったく!ドジなんだから……!」

燕の手を借りて立ち上がった幼なじみは力なく笑い、片手で胸元とスカートをはたいてせめて少しでもと汚れを落とそうとする。

「あー膝もボロボロだし。絆創膏あったかな。カバンカバン……」

燕は何食わぬ顔で手を繋いだまま鞆を漁る。なんか手が動かしにくいような、と気が付いたときには時既に遅く。

「……あ」

自然に幼なじみの手を握っていた自分に気が付いた。

「……」

徐々に耳が赤くなっていく。それと同時に、雨足がどんどんと強まっていった。

「……!……!……!……!……!……!……!」

お得意の言い訳口上は雨の音でかき消される。

案の定、幼なじみは燕の声を聞き取れず、キョトンとした顔をするばかりだ。

口をきゅっと結んで眉間に強く力を込めていた燕だが、そんな反応をされたものだからか照れて騒いでいるのもなんだかおかしくなってしまうて、はあと小さくため息をついて肩を落とす。

握り続けていた手を名残惜しそうに離し、燕は傘の回収に向かった。二人の傘は無事だ。もう頭のとっぺんから足のつま先まで濡れきっているというのに、傘を差すのもなんだかおかしい気もしたがひとまず手にし、傘を差し直した。

「まあ、差さないよりはマシだろ。：よし、帰るぞ」

早く帰りたい一心で燕は自宅のある方向をキッと睨み再度歩みを進めようとした。しかし、燕の幼なじみは困惑した表情で辺りを忙しく見回している。

「何、どうしたんだ」

燕は嫌な予感がして振り返る。幼なじみは青ざめた顔をし、無理して笑顔を作り理由を話した。

「え、ローファアール片方無くした：？」

辺りを見回してもそれらしい物は落ちていない。となると。

燕と幼なじみは同じタイミングで橋の下を見た。橋の下で流れている川は勢いを増している。川に入って探すことはおろか、近寄るのも危険なほどの勢いだ。探すのは到底不可能だと二人は判断し、どうするんだと言いたげにお互い目を合わせる。

「……」

燕は思案した。ここから自宅まではまだまだ距離があり、途中で砂利道もある。いくら片足だけとはいえ怪我をする可能性は捨てきれない。

「……………」

少しだけ気まずそうな顔をして燕はかがんだ。

「嫌じゃ…なければ、だけど」

そして燕は左足のローファーを脱ぎ、幼なじみの足元に置く。身長は小柄な方だが足の大きさは同じ年の男子と同じくらいの大きさで、幼なじみの足よりも少し大きいくらいだ。きょとんとしている幼なじみを見て、一瞬あつ、と苦い顔をし慌て始める。

「つ、ついこの前洗ったし、汚くはないとは思う！それに、そのまま歩いて怪我したら…心配だから。嫌じゃなかったらいい…から、履いてくれ」

他人からしてみたら無神経な行動だと思うかもしれないが、長年の仲である幼なじみは特に疑問にも思わなかった。幼なじみはしどろもどろになっている燕を見て、じゃあ燕くん

はどうするの、と燕に問いかける。

「いっそのこと……っと、これでいいだろ？」

燕はもう片方のローファーを脱ぎ、次いで靴下を脱いで裸足になった。

幼なじみは「なんで?!」とツツコミの一つでも入れたかったが、そもそも元凶が自分のため何も言えず。

「片足だけ履いてても歩きにくいし。…それに俺はちょっとくらい怪我しても平気だから」口が悪ければ、つつけんどんな態度をとりがちで周りの人間からはよく思われていない燕だが、優しさは折り紙付きなのだ。幼なじみはその「らしさ」に心をつかまれてしまった。燕の言われるがままにローファーを拝借し履いた。自分より身長が低いのに、足の大きさは結構違うんだなと少しだけくすぐったい気分になった。

「よし、早く行くぞ」

幼なじみは雨で濡れた髪を軽く絞り、胸ポケットに入っていたゴムを手にとって髪を一つに結んだ。そして傘をたたんで燕の真正面に立って向き合い、そしてニッコリと微笑んだ。

「え、何？」

幼なじみは不思議そうな顔をしている燕をよそに、その場で屈み背を向ける。

「えっ?!」

突然の行動に燕は驚きを隠せない。

「え、は……？　なんでおんぶ……？」

幼なじみは、裸足の燕をおんぶして帰ろうとしていたのだ。燕からは手も繋いで帰れなかったというのに。幼なじみはやけに積極的……というよりは考え無しなだけかもしれないが。『っていうか、普通逆だろ……！』

燕は勢いよくつつこむ。しかし幼なじみと燕の体格差は一目瞭然な程差があり、体重も確実に燕の方が軽い。燕が幼なじみをおんぶをするよりかは現実的な選択だった。

「……………」

燕にもプライドはきちんと存在している。

「い、嫌だよ、もし誰かに見られたらどうするんだよ！」

傘を差していない幼なじみはどんどん雨に濡れていく。もの言いたげな目をして燕を横目で見ると。

「……………もうっ！　！」

幼なじみの前では、プライドなんてものは無力だったようだ。

「分かったよ！　だから早くしてくれ！」

幸い、この辺りに住んでいる生徒は燕と燕の幼なじみ以外いない。知り合いに見られると



したら親か親戚くらいなものだし、親はこの時間帯働いているから見られることはなさそうだ。どんどんびしょびしょになっていく幼なじみ、己のプライド、現実……。瞬時に考えを巡らせた燕の結論としては、「早く帰れば大丈夫」だった。

燕は体を幼なじみに預ける。雨で冷え切っているというのに、なぜだかお互い触れ合っている部分が熱い。いや理由はお互い分かっていた。それこそ、二人は文字通り肌と肌を合わせた身ではあったが、どうしてかどちらもぎこちなくなっている。

幼なじみは早足で歩いていく。というのも、自分から言い出したというのに恥ずかしくなってきたしまったのだ。燕はというと、恥ずかしさよりかは不甲斐なさとか、もう少し身長が高ければとか、自責の念に駆られていて、徐々に照れくさい気持ちちは失せていた。

「お前、あんまり体強くないくせに、見た目以上に力あるな？」

気まずい雰囲気をなんとかするべく燕は口を開く。幼なじみも燕に合わせて、和気藹々とした雰囲気を出そうと努めて明るく振る舞う。会話は難なく進み、徐々に目的地に近づく。このまま何事も無く帰宅できるかと思えたが。

「すー!!」

突然燕が叫びだした。謎の単語を発したかと思ったら、次は幼なじみの後頭部に顔をめり込ませた。

要領を得ない幼なじみは足を止め、す？と問うも返事はない。

「早く帰ろう！」

先程よりも体を密着させて燕はぎゅっと幼なじみの肩をつかんだ。このまま問いただしても答えてくれそうにないだろう、そう思った幼なじみは小首をかしげたまま歩みを再開する。

（透けてる……!!）

燕が何も言えないのも無理はなかった。上着を着ているわけでもないのなら、雨に濡れてしまえば白いブラウスの下は当然の摂理で透けてしまうわけで。

（言ったら言ったでまた面倒なことになる…）

何か隠すものがあればよかったのだが、燕が取れる手段といえど体を最大限密着させ、透けている部分を自分の体で隠すことくらいだった。

不運なことに、燕のトレードマークである白衣は自宅に置かれていた。徒歩で通学するといふのに豪雨の中雨や泥で汚してまで着るほど適当な人間ではなかったのだ。

（早く着いてくれ……!!）

そんな燕とは裏腹に、幼なじみは楽しそうに歩いている。

（俺の気持ちも知らないで、呑気な奴…）

なんやかんやあり、二人は家に着いたが幼なじみの顔は未だに曇っていた。

「家の鍵忘れた…？」

雨で全身びしょ濡れになるわ、ローファーは無くすわ、鍵を忘れるわで災難続きだった。

「お前、踏んだり蹴ったりだな…」

せめて天気がいいのであれば、少し歩いて本屋に行ったりだとか、玄関で座っているとかし  
て待ってられるのだろうが、この豪雨だ。それも、幼なじみの親は三時間くらいは帰っ  
てこないそうで、外で待っていたら風邪をひいてしまいかねない。

燕は仕方ない、と言いたげな顔でこう言った。

「…うちの両親日付変わるまで帰ってこないと思うから、来るか？」

「ただいまー」

燕が玄関の扉を開ける。幼なじみは申し訳なさそうに燕の後ろについて行き、燕に続いて  
家にかかる。

「ちょっと待ってろ」

燕は幼なじみを玄関に待たせ、駆け足で廊下を走っていった。数十秒後、何かを抱えて戻ってきてそれを渡す。

「シャワー、浴びてきていいから」

雨に濡れて寒そうにしている幼なじみを氣遣ってだろう。燕は幼なじみにバスタオルを持ってきたのだ。

「タオルはこれ、ボディークリームとかシャンプーとかは適当に置いてあるやつ使ってくれればいい。：俺もお前が上がったら入るから」

一緒に入ることを提案しないあたり、弁えているといえるのか、はたまた意気地がないのか。

燕は幼なじみを浴室まで送った後、二階の自室に向かった。後でシャワーを浴びるにしても、せめて服くらいは替えておきたかったのだ。シャツとズボンはおろか、下着まで絞れるほど雨で浸かっていた。それらを全て脱ぎ、部屋に置いてあったフェイスタオルで軽く体と頭を拭いてからクローゼットから取り出した服を着る。その際、寝間着で使っている適当な服を着ようとしたが幼なじみに見られることを考え、気に入っているTシャツを着た。

それから一階に下りリビングに行き、燕の体と比べるとやや大きめのソファに腰をかけた。普段テレビなんてそうそう見ないというのに、燕はリモコンを力強く握りしめザッピングをしては唸っていた。

「あー……落ち着かねえー………」

意識しているにもほどがある。

別にやましいことをするつもりはないはずなのに、どうしてか燕はドギマギとしていた。

通販番組、教育番組、ニュース、バラエティ……。どのチャンネルも少しだけ見てはすぐに別のチャンネルに切り替える。

「……なんでこんな……んん……」

ぶつくさど独り言を垂れ流すも、気持ちには解決しない。

「俺もあとで入らなきゃなんだよな……」

はあ、と重たいため息をつく。何度体を重ねても、どうしても慣れないのは何故なのだろう。もう少し余裕を持ちたい。そういう思いはあるのだが、上手くないかないものだ。燕はまた一つため息をついた。

しばらくして、小さい足音がしてからリビングのドアが開かれた。

「何、どうし……っっ!？」

バスタオルを体に巻いて、髪も体もまだ乾ききっていない幼なじみが燕の目の前に来たのだ。シャワーで暖められたからか、照れているかは分からないが、頬は赤く染まっている。「さ、さっき言っただろ、あるもの適当に使ってくればいいから!!」

てっきり燕は「風呂場にある物を勝手に使っているのかどうか許可を取りに来た」のかと思っていたのだが、どうもそうではないらしい。幼なじみは困り顔のままわけを話す。

「ふ、服……?」

すっかり頭から抜けていた。自分は替えの服があるからいいが、幼なじみは着替えを取りにすらいけない。幼なじみも燕と同様に、ブラウスやスカートはおろか下着まで、着直すなんて到底考えられない程に雨水で濡れていたのだ。

「え、ま、マジか。いやでもそうか、そうだよな…。お前が着られるものあったかな…」  
母親は小柄だから無理。父親の服は大きすぎるし、幼なじみに着せたいとはどうしても思えない。

そうになると、答えは一つしかないわけで。

「俺の服、着られるかな…?」

燕はまた自室に向かい、クローゼットの中を漁った。

「んー…あ、あった」

部屋着にしようと思って買ったTシャツが出てきた。買ったものの、着てみたら思ったより大きくぶかぶかだったためあまり着ていなかった服。それなら都合がいいと思った燕はそれを一枚引っ張り、これだけだと下が…ということではーフパンツを一枚を取り、幼なじみの元へと戻った。二つを受け取った幼なじみは駆け足で浴室に向かい着替えに行った。

「サイズ、ぴったりすぎる」

幼なじみの格好を見て開口一番そう言った。

「もうやるよそのTシャツ…」

自分が着てぶかぶかだったものをよりにもよって彼女がきちんと着こなしている姿を見ると、自分の体の小ささを嘆きたくなるのも致し方のないことだ。

「……あ」

幼なじみの着たTシャツに小さな突起があることに気が付く。

（今こいつ、もしかして下着付けてないのか…？）

濡れて使い物にならなくなったから燕が服を持ってきていたのだ。燕の読みは正しかった。家に帰るまでの間なら、とりあえずガワさえ何とかなれば問題ないと判断したようだ。

「俺もシャワー浴びてるから！リビング何にもないし俺の部屋に行ってて適当に時間潰しててくれ！」

燕は慌ててリビングを飛び出て浴室に向かった。意図せずして興奮を煽る結果になったことは、彼女は知らない。

それじゃあと彼女は二階に上がり燕の部屋に行った。下着を身に付けていないこともありそわそわしていたのだが、本棚に気になっていたマンガがあったのでそれを読んで燕を待とうとした。

幼なじみの仲だ、何を気にすることもなく本を一冊引き抜く。すると、引き抜いた本の後ろに背表紙が壁側になって見えなくなっている本が奥に入っていた。

几帳面な燕にしては珍しい。きっと並べ間違えてしまったのだろう、直してあげよう、そう思いその本を躊躇いなく引き抜く。

彼女は自分の行動をひどく反省し、後悔した。顔が見る見る青ざめ、本の表紙を眺めるうちにそして赤く変わった。

それは、そう。まさしく「エロ漫画」だった。



表紙の女の子は妖艶な笑みを浮かべて白濁の液体を身にまとい、職業は：給仕なのだろうか、白と黒のいわゆる「メイド服」を着ている。

胸は現実的な大きさよりやや大きく描かれているように見え、太ももはやや太いものの他の部分は細く、エロティックにデフォルメされている肉体だった。体こそ発達してはいれど、顔つきは幼く目は大きい。顔だけ見れば、少女漫画と大差無い可愛らしい絵柄だ。普段こういったものに触れてこなかった幼なじみは目をまん丸くしてじっと食い入るように見てしまっていた。

生唾を飲み込み、一ページめくる。

またしても、性的さに性的さを重ねた絵が目飛び込んでくる。慌てて他のページをめくる。不快感というよりは、見慣れていないから恥ずかしい、見ているところを見つかったら「ヤバイ」という感情の方が強かった。しかし好奇心には勝てず、一ページ、また一ページめくっていく。

性的なことに関しては年相応、よりやや下回る程度の知識しかない彼女だが、絵ならば見れば分かる。

「これはエッチなやつだ！」と。

その本は全体的にアブノーマルではない、純愛物がメインの本だった。本に開き癖はおろか汚れ一つ付いておらず、新品そのもので、頻繁に読んでいるわけではなさそうだ。それにしても、非現実的でない程度だが登場人物の胸が大きい。思わず自分の胸を眺める。

まあ男の子だし、そういうのは読むよね…、とは思いつつも、少しでも心にモヤがかかっていた。彼女はほんの少しだけ妬いていたのだが、それを自覚できるようになるまではまだ時間がかかりそうだ。

他にもこういった本は置いているんだろうか、と思い本棚の手前にある本を取りそこで彼女はハッと我に返った。

この事が燕くんに気が付かれたら、怒る、嘆く、叫ぶ、一周して笑う、そして膝について泣いてしまいかねない…。

焦りをごまかすようにニッコリと微笑みながら、二冊とも本棚に戻した。勿論、エロ本は背表紙を後ろにして。

このことは黙っておこう。彼女はそう強く誓ったのだった。

頭を冷やすためにもゆっくりとシャワーを浴び、一通り済んだ燕は自室に向かう。

「あーさっぱりしたー…って、ん？」

幼なじみが自分の部屋で何をしてたのか知る由もないため平然としているが、打って変わって幼なじみは少しだけ表情を固くして床に正座をしていた。

「イスでもベッドでも適当に座ってればよかったのに」

違和感を抱いたものの、幼なじみを見ていたらまた「下着を付けていない」事実思考を奪われ、すぐに忘れてしまった。

「何で夏だつてのにこんなに涼しいんだよ……。かと言って暖房つけるほどじゃないしさあ」壁に掛けてあるデジタル時計に表示されている気温は二十度を下回っていた。

「布団にくるまってればいいか」

燕はまだ湿り気のある髪の毛を無造作にタオルで拭き、布団に潜り込んでいく。未だに幼なじみは微動だにしていない。

「……寒くないのか」

ジトっとした目を向ける。これは、寒くないかどうかを純粹に尋ねているのではなく、暗に要求しているのだが幼なじみは声かけにすら応じない。

「ほら、お前も」

燕は布団にくるまったまま幼なじみの腕に向かって手を伸ばし、ぐいっと引っ張った。それによりやく反応した幼なじみは、先程までの緊張感が無かったかのように笑顔で布団へ

と向かった。

幼なじみが布団にもぐりこみ、続いて燕は二人の頭に被るように布団をかけた。

「……」

燕と幼なじみの顔が向かい合う。

「……あんまり顔……じっと見るなよ」

燕は優しくはにかみながら、そう言った。

必然的に二人は至近距離で見つめ合う形になり、どちらからともなく顔を近づけ、口づけを交わす。

「ん……」

甘い吐息が漏れる。もう一度、と燕から顔を近づけてまた唇と唇が触れた。二人とも耳まで赤くなっていたが、求めあう気持ちはどちらも同じく、何度も食むようにキスをした。

「ん……っちゅ……っ……ん……」

二人の頭の中はキスをすることでいっぱいになっていた。お互いがお互いを好きだと表現できる空間なんて、完全に二人きりでいられる空間だけで、歯止めが効かなくなるのは当然のことだ。燕は本能に従うまま、舌を相手の口に挿入した。相手の舌と絡ませながら、

薄く目を開けて反応を見ては心をくすぐられもつと深くキスをした。深く、深く、二人の体温を混ぜ合わせるように、水音を立てる。

「…っちゅう…っん…っ…っちゅう…っ」

休憩することなく連続でディープキスをするものだから、二人は息が続かなくなり、同じタイミングで唇を離す。

「…っ…はっ…ご、ごめん。調子に乗って…」

二人の顎と唇は唾液で滴っていて、離れた拍子に一粒シートに垂れる。

「あ、やべ…ティッシュ」

布団から顔を出し、近くに置いてあったティッシュ箱から一枚抜きシートを拭いた。そしてもう一度布団を頭まで被る。

「も、もう一回…」

燕は再び幼なじみに顔を近づける。しかし、幼なじみはぷいと顔を横に向け、キスを拒否した。

「えっ」

燕は当然の事ながらかなりのショックを受けていた。流石にしつこすぎたのか、ウザかったのか、と一瞬で一人反省会モードに入る。しかし幼なじみはそういうつもりで拒否したわ

けではなかったらしい。ゆっくりとＴシャツをたくし上げ、ブラジャーを付けていない胸を顔を赤くしながら燕に見せる。柔らかなような乳房と優しい色をした乳首が燕の視界いっぱいには広がった。それに何も反応できないはずもなく、燕はめいっぱい困惑した。

「…っっ！」

幼なじみがたくし上げたＴシャツの裾部分をつかみそのまま下ろし、露わになった胸を隠した。

「いいよ、義務的にしなくて…」

幼なじみの体を覆い隠すように、ぎゅっと抱きしめる。

「お前のこと好きだし、ま、まあ、そういうことをしたい気持ちも無いわけじゃ…ないが」頭で考えていることを包み隠さずに、正直に言うのは本当に難しいなと燕は強く思った。

「これは意地を張ってるわけじゃなくって…。なんか、そればかりになるのも、悲しいっていうか…」

一応だが。燕と燕の幼なじみは何度もセックスした身である。それも両手の指では足りないほどに、何度も何度も、強制的にはあるが行ってきた。二人は童貞でも、処女でもないのだ。セックスした数だけで言えば、同級生の中で順位付けをしたらトップクラスに違いない。幼なじみは、それなのにどうして、と笑いがこみ上がりそうになる気持ち半分、そ

れ程までに燕の想いの純粹さに一種の感動を抱いてしまう気持ち半分だった。

「…バカにしたいならバカにすればいい」

本当のところ、自分でもどうかしていると思っていた。性欲はきちんとして、それこそ先程キスをした時からずっと勃起をしている。体の準備はできているというのに、心が待ったをかけていた。

燕は抱きつくのをやめ、ほんの少しだけ距離を取った。

「だから、さ…。また今度でもいいから…」

幼なじみの膝に燕の股間が僅かながら触れた。キスをして、自分の姿を見て、こんなにも体は反応しているというのに。素直なんだか素直じゃないんだかどっち付かずな様子を見て、幼なじみは少しだけ考え、再びTシャツをたくし上げた。

「だから、いいって」

燕が最後まで言い切らないうちに、言葉を重ねるようにして言った。

そればかりでもいい。燕くんを好きな気持ちは、今も昔も、これから変わらないから。

いつになく真剣な表情で、幼なじみはストレートに伝えた。最後に、勿論、燕くんが本当

に嫌ならしないけど、と付け加えて。

幼なじみは普段から気持ちをストレートに伝えている方だが、燕の素直になろうとする気持ちにつられて動かされていたのだ。

「はいはい…」

ぶっきらぼうな態度を取るが、表情は優しい。関係が進んだ今、お互いがお互いを蕩かし、心がすっかり柔らかくなっていた。クラスメイトが今の燕の表情を見たら、真夏に雪でも降るんじゃないかと噂しそうなほどに。

燕は学習机の鍵のかかった引き出しからコンドームを取り出し、装着する。未だにぎこちないが、焦ることなく付けられるようになっただけ一歩前進している。

真夏の寒さを凌ぐよう布団をかけ二人を覆い、幼なじみの体に重なった。

「……」

二人は見つめ合う。

「終わるまで、ここから出られない…からな」

ここというのは「布団の中」のことだろう。二人を覆った布団の中は一つの空間だ。これはもう一種の「出られない部屋」に相違なかった。布をめくれば簡単に出られるものの、二人



は「ここから出よう」なんてちっとも思わない。

幼なじみは燕の言葉を聞き頷き、ゆっくりと脚を広げた。燕は自分の物を幼なじみの秘部にあてがい、数回擦り付けた後狙いを定めて少しずつ挿入を試みる。

「……ん……っ……は……っ……」

難なく根本まで入っていった。燕は内心、感覚だけで挿入できるようになっていた事実に驚いた。もうそれだけ回数をこなしているのだ。いちいちドキドキして、ウブな態度を取ってしまっている自分はおかしいのだ。そういう風に振る舞っているというわけでもないの  
で直しようもないのかもしれない。

「大丈夫……か……?」

燕は念の為、幼なじみが痛がっていないかどうかを確認するために幼なじみの顔を見た。

「……っ」

幼なじみの蕩けた顔を見て心を鷲掴みにされてしまったのだろう、思わず強引にキスをす  
る。そのままキスをしたまま、ゆっくりと挿入を進めた。

そこから言葉なんて必要なかった。肌と肌、熱と熱、心と心を触れ合わせるだけで、それ  
でよかった。セックスはそれを行うための儀式にすぎない。二人にとってのセックスは自

分の快楽を追い求める気持ちより、相手に触れていたい、気持ちを奪い続けてほしい、相手にとって特別な人間でいたい、とかそういう気持ちの方が強かったのだ。

とはいえ、まだまだ学生の青い若人だ。それなりに性欲も含まれているのだろう。それでも時折二人の口から漏れ出る、「好き」「大好き」「もっと」だとかの甘ったるいとも言えるような言葉の端々に好意を超えた「愛」が紛れもなくそこにあった。

二人は小さく喘ぎ、息を荒くして、相手を求め合い、貪った。

小一時間経っただろうか、お互い気の済むまで貪り尽くし、果てた。

燕は力が抜けたのか、幼なじみにのしかかるようにして倒れ込む。

「あ……っは……っあ……っ……」

二人とも同じような、気持ちよさそうな顔を浮かべて息を荒くしている。

「……っはあ……あ……っ……」

燕は布団をめぐって顔を出した。流石に息苦しくなったようだ。簡易的な「出られない部屋」とはいえ、難点もある。

二人は事が一通り終わった後、疲れ果てたのだろう、夢の世界へ誘われていた。

幼なじみの両親が帰ってきているだろう時間になっても、二人は幸せそうな顔つきで眠った。

＊

「つーばーめー!」

「むあっ」

突然の声に驚き飛び起きた。この声は燕の母親のものだ。帰宅したばかりの母親は、玄関から大声で燕に問いかけた。

「ねー、何で靴三つあるのー？燕、脚もう一本生えてきたってわけでもないでしょー？」

「あー、ええとー」

メガネが外れて視界がおぼつかない中、片手で頭を抱えて燕の靴と幼なじみの靴のことだ。母親に靴を指摘され、燕は全てを思い出した。何故幼なじみが俺の部屋のベッドで寝ているのか。もとい、何故俺の家にいるのかを。冷や汗が全身に滲んでくる。

(やばいやばいやばい！)

「もしかしてお隣さんちの娘さん来てるの？いい時間だし、そろそろ帰った方がいいんじゃない

ない？」

「はいはいはーいーい！」

思わず辺りを見回す。全裸の燕、そして横には全裸の幼なじみがすやすやと眠っていた。

（この状況を見られたら、何を言われるか分かったものじゃない！）

慌ててベッドの下に落ちた服を取って袖を通し、枕元に置いていたメガネを手に取りかける。

「……」

幸せそうに寝ている幼なじみを起こさないように、優しくドアを閉めて部屋を出た。